熊本地震の被災地を訪れて

常務理事　有岡 正樹

先日熊本県山鹿市の病院に入院中の、シドニー駐在時代のボスを見舞った。その際に“ついでにというと申し訳ないが‥”と断って、彼の知人関口氏に熊本地震の被災地を案内してもらうことになった。彼の運転する車の助手席に座って山鹿市から熊本の農村を一路南に向かう。彼は山鹿市と熊本市の境界にあたる植木という地域に住んでおり、熊本地震の被害の大きかった益城町や西原村に近いこともあって、震災直後にはトラックの運転手としてボランティア活動に参加していたという。現地の状況をよく知っているとのことで、半日余の短い時間であったが熊本市内も含めていくつか要所を案内してもらった。

熊本県山鹿市では、全くといってよいほど地震の痕跡は感じなかったが、そこから南に向かうに従い田園地帯を挟んで遠目に見える農家の屋根に、ちらほらブルーシートの色鮮やかさが目を引き出す。やがて益城町に入ると、さすがに３カ月が経って、テレビなどでよく報道されていた道の両側の家々が廃材の山となっている通りは片付けられていたが、まだまだ県道沿いの家並のそこかしこで、写真に示すように倒壊したり、傾いた建物が目に入って来る。今回の地震で最も被害の大きかった地域である。

そうした光景が 10 分ほど続いたところで熊本市内から益城町～西原村～南阿蘇村久木野地区へと向かう県道 28 号に入った。丁度今回の直下型地震の源である布田川断層帯の真上を、西から東に通じる道路に当たる。右の写真は、益城町から西原村に入ったところだが、家や電柱が傾いて地震の痛手が残っている。そこで脇道に入って車を降り、辺りを少し歩いてみた。手押し荷車で杖代わりに身を支えてゆっくり歩いていた老婦人に会っただけで、人影はなく静まり切っているが、地域として生活は営まれているようである。

そこから 28 号線を南阿蘇方面に向かい、ブログに‘田舎を通りぬける味のある道路です’と紹介されている山道に差し掛かった。田園地帯の山裾には写真のように集落がブルーに見えるほど雨季に入っての応急措置が取られているが、それほど被害が激しいようには見えない。東日本大震災の完膚なきまでにがれき化した光景が頭にこびりついている故でもあるのだろう。何度も通った東北 3 県の津波被災地のことを思い出していた。

災害からほぼ３ヶ月、東日本大震災では自衛隊車両やがれき運搬のダンプカーなどが道路交通の主体であったが、今回の熊本の地方町村では地元住民の車と思われる小型乗用車がほとんどいう違いや、まだ多くの崩壊、半壊家屋が残っているのにボランティアと思しき人影はほとんど見かけないというのが実感であった。案内してくれた関口氏によると５月の連休をピークに震災１ヶ月でほとんどボランティアも来なくなり、また県民の多くの心からも震災の事実が離れ始めて行っているとのことであった。

そういえば震災後間もないころのテレビニュースで、また４月 29 日付日本経済新聞では「孤立の西原村」と題して、西原村の山間地域で人口が 1,200 人の河原地区では、10 年前から地域住民の人々の過去の経験も含めて何が出来るかを調査し、それを台帳にしていたこともあって、小学校に避難してきた人々が自主的に分担を決めて山積する様々な課題をこなす中で、悲嘆にくれる暇もないといった形で住民を勇気づけたようだ。７ 月半ばの NHK「あさいち」でその西原村のことが紹介されていたが、そうした地域の結束は若い女性に引きい継がれ、そうでなくても高齢化の進んだ地域がいち早く落ち着きを取り戻しているのである。災害に係る住家の被害認定といった行政の公助を待つ中で、住民の自助が先行しているとの印象を受けた。CNCP の自治体インフラメンテ研究でも市民社会との「参加と協働」が一つのキーワードとなっているが、良い例を学んだことになる。

そんな西原村を経て、熊本空港経由で益城町に戻ってきた際、県道 28 号と 235 号の交差点で写真のような光景に出合った。外形は残っているがかなりダメージを受けた ２ 階建て民家横の歩車道境界に、H 型鋼が地上から 3m ほど頭を出した形で６本打ち込まれている。余震でその家が倒れて、一旦停止中の車を押しつぶすことのないようにとの配慮であろう。他にも実施例があるかどうかは知らないが、いかにも土木的な対応策と思わず苦笑した。

完成して今日から入居を受け付けるという仮設住宅や、何百台もの車中泊避難の乗用車が駐車していたといわれるグランメッセ熊本の広大な敷地などを見て熊本市内に入った。そのまま熊本城に直行したが、城内はほとんど立ち入り禁止で、そこかしこの石垣の崩れに被害の大きさを見ただけに止まった。重力式のもたれ擁壁としての石垣の背面には、大きな玉栗石が奥行き 50cm～1m 程度の厚さで地山との間に埋め尽くしているのがよく分かる。積石間の無数の隙間が排水管の役割を果たしており、土水圧では崩れない構造となっているようである。

わずか半日余の見聞だったが、教えられたことは小さくない。